佛法仏祥地

二編

中村俊定文庫
文庫 18
852

俳諧仕様帳二編序

中村俊定

活富貴綱。さきに俳諧志やう帳といふ
さうしをあらハし。いまハくそれが續編
を志るせり。おとをバきい乃あざれよ
うおち。心ハ道のまるべきぞつくせ留。
其ほ ふまめ形るおとと。みやびと

さとびのロさきらうたそすハまなくの歌仙さちもんのそたゐまつめくハまぬ信しかし呂潤たれゐまいのたしゝがさをと云ゐ若たのハゐ思ふ張りハ初編ふつぶさに志るしおぢぬれ渡ゐいまハ何をゝとたたふるを

あくふりを幣てまう信来つるに
狩とがぬしゝ乃云の狩ゐまを高づと
ふものせざらむハ旅の西くてゐ時西
ゐあをぢ古池をとひ君るふ蛙ぶふ
かとおハぬやゝふおがえら主て呂ふ
ゝくにあきゝらう泳渡いゝ泥くと

いろ色ふかに。の乃景為もいとさる
斗と波。おめひいづる百〻手をしつる
書ふあし豆。その心祈しふまうさる
ばる里ふ太ふ学。

硯寿世を純阿弥陀仏 景彦

男 恭齋文書

味華

風の葉とつふあ社あ梵よ尋秀埜と
ゆうに以もひうすふそう屋手楼のる
なる春〻ふ生のうん葉月の月えつうら
波つうよ連とよそ宮ういと寿かるそう
ひうそう社屋波もよせうまうそう宮
殿構図ゆ薩薩徳弁いうもえつうそ

煙霞のめくらるるはいかなるを
一時の幻境手のうらを返すしばし俗塵
四時の変化まさにしるべきなる唐
土もさいつの国なる世界みいつる物なれ
ども第五位第五なる初めなるそなたの
国の数りは唐土楼閣の境用の家
うゆかの活高ら仙術なる一時の幻境を
まうこの一巻のうらはけんを筆を
うばうる物責ふるうらくうう
一三保八年丁酉春
由吉宮殿人

蔵書印

武者修羅房

清人賞番齋

南賈俳世度

主人名活齋

蓮堂老人識

蔵書印

俳諧仕様帳二編

活叢是綱著

人に相談をしふるにゝんまどハ次やうにをし
ふるものありこハ和のれのかしこきを先に
ゝてむとするつぎふしていま世のちゆり
るゆかりをしへをうるくふ義ちく漆を
おもへばよかゝぬるゝ目ふちゝちくちまてゝるゝ
をも形さぐりにこそさとすべきうるざちおも

一日俗僧の草履どもをつくりぐと味ひ居る
和尚のためにたすけあらんるを伺られ
とひろひ集るに古人の筆に述おられ
さるふを高くの大和の引ことなきハ童
歌の耳に聞とりぐことをバ今ハうの和尚
の歌ハ山へと云やうにおどけ咲ふことちつく
耳をとゝ出あゝハしをもらハせおぐらにたふ
入きんともぷゝこのころ和尚ふるすありさるハ

合仏にふしをつゆゝ歌ゝ有りあげ家に
うたゝせいつしら法の乃ふいまふしその
ためしを思ひもくんをさあう出つくれバ
宮ふ色ぐちる人の員ふハもどかしうも思るべ
き色ど世に有ぬ物へつらひくんのまことを
うしちのハむハもとよりたくる本意にそむけ
む笑ぶゝらくとの乃のひとすぢを脇ひらぐ
ふ有せるまぐ有りそもく俗僧ふいひいづ家

るゆかんの人のまことにあらぬ言葉ハ世俗諧を
むねとし殘のゆ袖に蹴の笠しめふぐ收俳り
の大力きあらやまさらめきこる紙衣
ゆふくれゆふにをとりしきふ〳〵と変へ
面白うつくりかしをつくびきくにハまと笑
いせふくびゆひめぐ〳〵せぐぐふもとんふ感動
く涙ぐまし〳〵思ふるやうにつくりあせるでさい
ういありけるをあるをあまものゝ乙さりがは

あるゞたぐ面風とく〳〵俳諧ふうとくにかろくいひ
とうく俳諧ことゆふのそゆふ〳〵ぬを上ものゆぐ
ともそをゆしいゝるハうの編諧よみの編諧さう
ぐゆひとし〳〵さらい〳〵ゆぐ〳〵俳諧をさう
ざるハいとゆもうきゆぐふハあ〳〵ぐゆは悦に
ゆりく〳〵ハよく〳〵ゆひさるぐきるく糟味噌
とくくも味ひあり白味噌とくもそこねる
もあれバあゞうゆぐふのくまどハさるぐうゞぐ

古人の句作を眞圖ふかくしめ吉野すまぐ
んをよせをるのまどひをあきくめちるぐし
むいらいのむいらいるるすをを大ぐほるあと思へる
どちも初ん時のんぞんをを忘れぐんをきふく
いひあぐきるあり修行の功はけごのざとく
一きぐ二きぐのぼれるうちにんをを号を後
すると羽をを求ずしを後に天性の風骨
をなさをいい自由にいひとらんるををぬぐし

ちるををるう功者めきたらんハたまくよきこと
一句ずりよりやはるうりと思るも情んの
たぬうくるずりふくあるくにワざをひと
ありを異端おとをふくぐひぬぐをを
又一句のうちあの名ふどを深がほく
ふをはじへくぐぐ変ないひ入るハ遠望の
初んのまおどふうちやまくハ思ハすべ
をまでど沈変ふをおとりせるくをあり

又附句ハ俳諧の中とする所あるべバ前句ふよし
おくことゝりたゞふハひとりしるすまひとる
まねをかし中よかゝぬ人のあゝひさるゞ(ゝ)
玄象の琴もつれ糸ふとそとれことしの春の
用ふいとゝねバすゞくゝ前句をうけるくのち
さゝくハ附句をおすゞきワざありされバとてあお
ゞちふ附句のおゝとしるてるハおゝくに俳ゞもと
めくゝの輪廻することあれむ出ゝこゝふハおゝひ

あることとふくゝいまそゝるをいまんとすたとへバ前句
系色おちバ身ゝいひ立の句たるゞゝし前句いひ立
おちんふハ身ゝ系色の句あるゞし四句めハ銀の
句をゆゝじくかくらざらんやゝにんを物すゞし
百員の表ハ句のうちハ神祇恋雑の句ハ
せぬすおれと法乗の俳諧おゞ前句神祇おちバ
銀ゝおちバ俳諧ゝ雑ゝ返ゝ雑の時前句祇おゝバ
銀も釈おりゝの俳諧ゝ恋の前句にゝく

無りするハ左ゝるしのゝぎるをを引ハあまりみゝぐ

古人ゟ

小傾城ゆきゝゝふん家の雪
形印にぞゝり 仮 の 墓
吹すゝす袴のひざのあゝゝて

又

炭売のおのゝ家あこゝゝ思ゝめ
人のゝゆもひを結ん雪家ゝ

花蘇る骨の雪ゝ雪ゝ消ゝり

又

眉 帚の霜ゝつ 嬰子の白ゝ左
蛍 消ゝと 帳 の 紙 とく

おとのゐ二ゝの墓ゝ菊ゝ枕して
三白めより来ふ云もるハあ〳〵 細 意の白
あまりふゆゞゝるしきゝゝある白ハせあるゝく
さゝく世ふいをゝ白の切字をそゝいひ

ざ面いろ〳〵あれどあぼつゝふぎぶ有るゝハいさ
ぐゝもさしをこゝとゝさざれハまづおろゝハせぐる
ぐよきゝん又紙白あゝぬ孝白の中にもかゝ字
おさゝ字あゝゝんとゝもくるしかゝざる白も
あれ心支と字ふまゝせゝふ白のハかおいひわふせ
こゝ一白のたゝしゝあゝんハこハ制の限ふあゝぶ
ゝ恵熟のゝひぶちあるぶ稿の字ハしゝる
鳥こゝそゝんふゝきゝぐゝとんぶぐべきゝる有り

いとあぶきゝ白のつゝ字〳〵に仕様脱の和編ふまら
しゝあるそのことぶゝさを思ひつぐ字ゝとゝかゝ
ましかゝゝゝゝゝゝとゝちゝゝぶきつゝ学ゝとゝ
をれるを門ゝちたゝゝゝゝとゝすれバ学ゝさしおきゝ
弾ゝとゝふふ モシ法兎ゝさりませ私ハ神田白
の者ぐゝござゝりますぐ私ぐゝハ赤ゝ兎とゝ申ゝし
てへゝうさんあぐゝ俗猶ぶぐゝこゝさりまゝ時ふ
おゝ前ハ法真ゝ白ゝ〳〵イヤ先生ゝ〳〵 活 ハイ私ぐ

すあいち　活　あるごござります　（表）　おまへがたんを
とつかりますまバちとおまをしぶあつく案り
ましてさてかのるごもどさうませぬが先ん
達て俳諧仕様とやはをおもしあされ
ましてをまづすしるまふとにきりの袋より
ふもしるまるれバ孫娘小袖の先生やはを
所の大人やふるりの命の序もあれバ宮さく
高風お出流もあるふと私も俳諧執んなん勝手ぬ
毒ほどくさてるんぐるまるれぎちとかぐんとハ
ちろをのちびあまるるの俳だましのやうぐいどうも
俳諧のるをりとハ私ふハおあるをませぬ蕪つの
西風るるちらいのすぢといふをのハあくした
をのぐいハどざりますまれてそぐちとぶし
つをあるるる和俳じやたいるすもどざつて拙系
殺ましたのじやぐまづはを宿ぐ大仕合せ
ゆるくだんくおちをしをやさう　活　それ

いくようおいぐくあされさちらしを伝授のゆふおぼしをふうかいぬハどういふのどこくぐござります（嘉）イヤどこくぐうかいぬふあれハ九ぐくこゝもとといふものぐ義のたてるさいふハあくした酒盃ハ一切かいまづ全体和歌ハさいふいを何とんはくくござります（活）ハイやまりさいふいとんはくをりまするぐ考格ふいハ何とマアんはくくござるのじや（嘉）イヤ足しうくましハこのさいふいを先段目とんはくをります（活）ハアそれぐくハ法ものじや段目ハ連歌の首句にして数端の句あるあふそこぐく段目と云のぐくござるが俳諧といふことハ口ざごとゝ云義理ぐ考ふいふ情をこさまく云義ふにあぎ用ひてく思ふんをいふことのあれバそこぐさいふといふのぐくござるすぐに清潔ぐ真儀物ふもさいふハ俳諧あり俳ハ妙儀物ハ詞ふ考也といされ

ましたどやござ〳〵ぬう又史記の滑稽伝ふも酒を
流す器也といふ〳〵まづ伝ふるをいひもすふも
器也あく〳〵用をあすゞ器也俗潜の者一ゞやを酒
器ふたと〳〵こそ器ふ酒のうちうる時ハ鞠酒して
酒を吐とその注ふあるごとく滑稽といふるすハ
俗ふり〳〵ぞおどけにくおどけハすかうち酒器
あるを何ぐふちんぐつぎ〳〵どざつこ志ら神ん
のわまふまんざら稚のあい時ハあ〳〵ふをくハ可る

ざやまとらふ情ふおつるをあぞゆうハ〳〵ら思ハれく
てこぐ蓋つの一流を志ろくをし〳〵られこもの
あれバ神編ふそ中毎りり

人ふ器を賞ハせく〳〵ふるとゝ忘れ

器をよくきうもやを器ふがふ器の志ゆをぐどざるぞ
この自のふをひらこ〳〵やさバまづ忘ゞとゝ忘れハ
人によき器を賞ハせく〳〵こ器ふ忘れく吾ふ
し喰たふし〳〵ふ器ハとゝ忘れするあり

まつのをさきちやつこがどうぐどぐる世ぢくやたをたち
のいろ恋しるあそぐるハとのくるいかとのしやと
いふ事をこふしをうしういたれとのしやそく又
いざくらバ雪らんかこころぶ不まぐ
見ハ義をきにくおうつ雪らんを何不まぐりと
人のとりぐかてとろぶ不まぐりまきあうと義
のさんやをしやこの白をかの川柳点ふハ
ころぶ汚バ義の雪らん果ぐかし

けちやをこハ泊ふもつとうれど義のきやをハ中移の絵ふ
ゆかどのかぐかいろ恋ちやをとハねうら雪えあさう
家蓄の人とをナ面づくりをしいをとくくく注
あぐ白貞しくこといみさたあしも今近世ぐたその
時くのたのしみあぐさめ俳諧を樹古しあぐう
そのをいうふ拾んぐのしやいうふ田舎のぼくねん人でる
まくらやそこの義るをさふ不ぐく貴ッく
瓶ぐ義るとよろこぐうう癌ぐ初ちるといたぐかうう

弟が感意はしく〳〵なりもてはやしもくさませうとよく
あをつゝもつゝくつるやまちやもさうしをつくれバどこもも
ほしみおする俳諧あれバ面白くこゝをこゝをまろ
こびあのまるたのしめ四季の美景をゆゝやうふぶつ
〳〵ねむらいさらいを俳諧じやと思ハちるあら
以其性知ハ中庸じや志ゝぐせつゝくにもあいまひ
とるいひませう

はたのむ梅のあるもあやうき本立

元ハ源氏物語の榎ゝをふるを大羽の法師あるを
こゝふもとつきゝ義ゞ和ゝよくおもしろうきられれ
ためゝ中葉ひ義の中の第に源氏ゞあれバ手不
もひとゝさうよみませうとゝうゝと乳をもち
つゝあをよくきうきちやをゞドリヤあんとあるエヘン〳〵
「おハ〳〵はゝ〳〵かゝあはけさせぬくまバ義ゝたう
はきりをほとけのゝぞすあのかぶりおとろへぞ、
おこあひ落ゝりとるを面うあゞとうやりを

うきすゝひらり、ほいをもとけずともちぎりきこえ
しことと思ひあつく
あちらよりむかげとゝのみし桂うめを
むかしき香ゆかりふるうち
とゝく桂ふようねゝくるをもつゝきくこゝいのゞきく
めぐりあふる云云
とゝくあるこゝのゝを幻強者のあれ行しゆよりく
ひとすぢにすぐゝをおしゝめ山形む

花の本と風流ふ高をゝらられゝこのゞやあんとがてんゞ
四きはしゝこゝうゝをもおゞ酒の義あゞゝこの義の四を
川柳ゝゝ

山形むゝ桂の実をゝ有り出羽義
色い桂の実をいふゝつゝ四のゝとゆせゝるゝ
川柳ゝゝふゝよりゝ俳諧のゝゝにこゝゝハ
つゝゝだゝれと云ふあゝゝゝ一句ふゝゝゝぬるゝゞゞ
酒義ハゝゝれゞゝ山形のある恨をゝゝいと

つゝとゝとゞまらずば生涯かのやうなるはかいぞや

（志）

あるおどしはいそれをはなるゝばどうやらきものやうぐゝまゝ
ごぜうりまするぐ者らしまぐ〳〵いかるすぐどぐるゝかあ
時をのかのうちにねつゝ部ふそぐあいあかぐごぐる
あれハどうぐそそうとかのはるをを雪見してあり
ハなかの吳ゝゝゝいたいとものぐごぐうまする

（活）

ゝゝるハ初編ふをすかハち云ゝおきまはしこぐ
部を雪見しをあるといるハ生稽ふうぎゝ浪
言語家人がそんあるすを云まぐもと部といふものも
かりの貝ぐじやごぐらぬうかるまるよゝ浪 狂義
ゝもふ狂義ぐゝも後言稽作ゝかのるまも正月のの
部白ふ出やうとおもハぐ正月をるにのゝくさて
頭をそゝるのじや部ふずうちゝぐ入りゝことの
部言のうゝぬのぐいうゝも世界にあるやうぐ
ごぐるされぐとくゝ白れたふ個ゝ雪もあゝぬもの
じやゝ部言の立たゝぬの吳ふを言ふ

いひまぜうすぐに春中吉人の義白に

櫻ふも花ふも多こゝぬ絲やとし

といの絲の白ぐござる色ハ櫻の白ぐもあく義の白

でもござらぬたゞ絲の白じゆゞ櫻ハ人をよろ

こむ吉る貴一のことのあれどそれさくつんあと

云くあるのぐく絲のちあいれゞよくゆへまゝすえ

夏の油ゑあこ

夏ゝ風るの扉する枕ことゝ

色ハ夏ゝ夏の白ぐござるゞ夏風とゝ書をある

のぐく夏の白ぐあく風の白ぐあくるの扉の

白ぐもござらぬ色又絲のあれの白じゆゞ

のゝハ吉りませゞ紙諧ハそのゝ春ゝ吉

のゝゝハ色ハござらぬ鄭ハあくてを絲ハ絲

のの白鄭を結あく用をあすとおもつくござ

をバ百遠ハあいゝ色ゞこゝ白のゆゝも

君ゆゝゝ百らごりすこ吉のを

色ハほうづきの白ごハごとらぬされバとくまる
色ハ竹をまんざらよそふいてされぬじや爰を
よう考ル人や事ハ狂文じや
京流水影ふちゝの入ると白ごるのハ
もよう赤いつぐござる影のかるさをあく
あしらいくさくてふ附とのがるる稲
よらものごござるて水川を赤のゆふも
年号代名か地宮流字書 秋の家

仏ハあくりの古事の力
からふ怪物の白ごよいと功者人がいれ
ましたよく味めくごらしろ（嘉）あるなど
色もいれをゆバどうやらたものやらたゆるえます
元来おまくのお稽のすりハ俳諧ハ滑稽じや
滑稽ハすあいちおどけじやこちおどけハ古や
主のようじやとさつきもすぐにいを古やっと
がされバそのおまくの古やをくこすふ古おまくの

俗諺をいまこゝへうちもりてこゝろをせくこゝろ
さりまゝにこゝるとものこゝろあとゝもをこゝ高ふしふしと
こゝろもいちゝく行きまこゝ弱きますすでそゝ 活 まづ
おしいは行ひしくはしくはしも大きいはしまゝ
まづ俗をいひまゝせうかヨシくゝ行のからぐ
のゝをは屋なゆさこゝろ 表 イヤハヤ それハ
俗とは見屋こゝそだゆくゝ見ハれます 活 そん
あらゝ行のゝすかもかぐゝ人のからぐをこと

ごとくゝ見の書ゝこゝ天宮の上まぐすつぢゝふゆゃ
さこゝろ 表 それハいゝゝをもおもしろさゝ家ゝつぶく
やりあゝゝ中書しをゆメまゝせう
こゝ宮こゝしゝ見の書ある天徳ち
モシくそれハどゝいふ白ぐゝどぐざるぞ
活 いゝハ宮宮あのゝへゝゝ面の方へゝち向ゝゝ宮
きゝんこゝ白ぐゝどぐざるそこぐゝ天徳ちハあしの
ゝゝぐゝどぐざゝゝゝゞ

江戸の雪つもりぶし 弧の山もとし

（甚）モミ〳〵 ねまち雪 雪山と云て 雪ふまぢこの山

かしとい まぢ 雪山 雪山 雪山あるのか

（活）ハテ ふるい 雪のやうじや 見ハ又 下野 雪の山のあい

ねぢ 雪 見 つもりの 白じや あまてのやうに

一白〳〵に モミ〳〵といそれを ハ 伝ぶん 白 雪の野

テ あり ます 高 雪 ふる ぢこれハ ぢじや

こ 見ハいふといふ〳〵 ふる〳〵 ふる〳〵 ふる〳〵

雪 屋根や 雪びの 見まく 江 機婦

雪の 機 江 雪 花の 見のふとさ

雪の 見 聊 雪 見 雪 仕 也

雪 雪 雪 雪 つめ き 機 を し る

獨の せば 新 ふ ふる 雪 山の 雪

よ 雪 を 皆 雪 ふ 雪 雪 ん ら

屋 雪 る 雪 ハ い 雪 ぢ 雪 雪 船

京 の 雪 獨 自 無 用 の 遠 ら ん

雪のあめふりてをかりろ ほそ天王
雪のはや 高山をつくる ナッの指
雪の高郎 聞トゾ 帽を追ざ 高の
再雪せさき あ ぶ 雪あ 雪の雪
ものくぞ ふ入る ふ 風の雪
雪手や負けて 裏 ふ 沖のある
白紙に目の ふれ ふ 雪の 絵
雪の雪に 濡てつ ふ 雪を 分

表 モシ〳〵 ふ ふ 天 雪 ふ よ 〳〵 を 雪 ぞ 雪 ま ふ
〳〵 を ふ さ れ
雪の雪 巨 特 ふ 雪 の さ ふ さ ク 分

活 ふ ふ ふ の ふ に 天 雪 や ら ふ ふ 表 イヤ
だん〳〵 ふ ぐ 〳〵 ふ る ふ れ じ る ぞ 雪 ふ よ ふ ら ふ
ま よ ふ ふ 編 ふ ん の 絵 ふ ふ 云 る ふ ふ あ っ て 雪 ふ ま ク
て 雪 ク ル ん の ふ ち ぐ ち 和 あ ぐ り を 雪 る 時 ハ 分 ク 和 文
る と い ち ち ゆ ち ち が 六 和 め ぐ り ハ あ ま ち ふ ぐ い 日 和 橋 の

大きゝ丈ハ三寸位ハよかろうがぶん〳〵かたへゆくと
角ばかりなれど高麗がらがたく〳〵ゆかりハ
いつぱいあるふなあしたゝ旅籠やなれば一斬ときふ
いとゝもあるまいそのうへ〳〵ほしい旅ぎてひとく
川端の大師さまく〳〵せへといつてくいたそうが
あいなつしげすくうるまつすりはすごの
下ふ長松どのふとう〳〵さもあるのう高麗仕来
ぶつえまずそれを新宗やッてしされ（活）ハ

又ぞんのふのおぬ者ゝし何を旬ふするもん
のあんでハあるまじるすゆへ〳〵ぶん高麗を
云ちさきく〳〵ドりや

高麗　江戸のもゝ有るの高麗何くぞ

仕来　用のあき仕来もあり客の偶田

九高麗　高麗をわるよふあるよ客ひと日

扱扱　客ちもめをもあつふや　法華ゝ

文字　見張いろらふもあく〳〵客の森

白敷　積にうらうらの敷しや板屋の雪

玉あられ　玉霰の上をふる也深板の雪

日記　雪の勝日記の営をぬる板屋

證文　雪橋や證文もなき罷ども

借文　借文の取りにふるや頃うちの雪

宛名　請取て借用につゝを宛名め

覚の　雪晴よりも覚へ入ぞ夜の雪

竹葉　竹箒見ハ冬木ぞあり、雪の二廓

帳　雪乃日や傾城の帳見て笑ふ

目録　目録ハ智箏の手続ぞ、雪明り

仕切る　一雪の亀酒屋の仕切の見ゆる

覚え　雪の様三ツ子九嶋の覚えあり

先板替　雪の思ふなきあやし先板替殿

金子　雪の夜金子のすハ出て返し

大判　大判の重落すなよ橋の雪

小判　極楊で小判を送ふ雪見かな

吉野
武蔵
金澤
武州
南蘇
上根子

雪掻や吉野武蔵ぐ大一世
根の雪や武蔵の加賀ふハ武蔵の花
雪の里人ふの信の吉ゝさとり
雪の根ふ邦よりよとふ雪し
降積す雪や不得松ゝしも
南蘇のふる里も有り雪の蕾
雪のひや半ふるをしき上根子
丁根ハ浦蒲ふ有ゝ雪の蕾

丁

吉板

原ふ

原吉

ゝ

考

吉板ハ菓子の名ふしを雪の里
雪ゝ也原ふ根ふ一名ふ河
原と云ふ奈も悟ゝ雪達ア
ふ浦男ハ板ふ投ゝつ雪保
考ゝ浦ふすやゝぞ浦の雪
（赤）ゝ吉ゝよしくゝ雪ふ仕舞まぐやられゝハ
里の志びきの慶原ゝ吉ますゝくゝ（活）さて
何ゝをいひもすのもその部をゝらまゝく張ふ

るを祭りけると信ずいふなとこのぬく係ふ白葉の
うりぬのごくいあいこるすとふおられども兼く後の
義のうちふ祝階学の仕入ぶ大るすじや仕入さこ
角しうあれば三仕入のカふいつでるどうか
まのろあられる三仕入といふすふつるもふ思に
もしましこどが出る格盗うといふるの仕船があるが
仕なさ 嘉 見ハくけしこうぬ何るふもあれ盗
むとしふハ 活 イヤチョイとひとロ出ぬく三あうふ

あきれさこあるふ法の奥盗も盗人とハるけの
遠うこ盗ううこどやましがいふるの乳を高角ぬく
ヒッうりとゆのくおうこあやまに蔵ハ何るすう
よくぶよるふ人のこ似をするう盗むうせざれ也
むとづうれぬこのどや祝階もこ盗り結を盗こ
ふを盗こ又長句を盗こる掻骨大集胎とく
法いあれど糟粕をあめるのハるいこ蔵の句が
いひさく蔵の入用の時ハ書の句集を五むく

その中にある當の句をもしるす

當や隙に蕈する椽の先

といふ句があればそれを當やきをしるす

當によごされぬ雨の隙

おとしをしらるるに月並おどしにもしてつるるや

さうすると判者が見を五点ふもちやうと一ッこんハ

ありふれが當に隙の駄句ハまてちとふ首をかゝ

ぶるもりゝ義の句を盗みをッとられが付ッず

化があふれそこぐ〻盗みとがるいとさつばり点に

ちゝぬぐやを扱又うの五百駄ちとのうちより拾ふに

耳点ぬ句を九盗ふしてをいか駄ぐもしたまく

る点にあるもあらうが沿ぐ出れきバ面目ちく

点にかつくもおもしろうゝねむよくくこれハ

つゝしんぐ九盗をハせぬるじやさて盗句と

いふるに寝ふひとつの法があるじやてまづ当の

句が入用おぼうつくく夜の句集をおもしをし

時雨あどのある所ふ初編の中ふとある雪う雪
ふるしあどの句があらば苔あれば苔の題句雪あれば
雪の題句雪題句ぞうりをうはく盗んぐく

雁　雪の日や行の穴うう　雁堂

雪　初雪や雪に寄の費る雁

九雪　ふくまてを強に出るう雪の鳩

鶴　雪打や庭雪を樹へ追上る

雪　分をふるふ雪にくふるや雪の松

雪　志ぃぶきふ雪の迹りり雪の雪

鶴　積雪や家のうちちる寄るの鶴

家鴨　初雪やよごれく屋る白家鴨

木兎　木兎の家く時形生つ雪の竹

鶴鈴　草の雪鶴鈴の尾ふ及くる

まつかぜいふあんずいふ題句牛を盗あハ盗人

ふハあくぬさくまさ時雨を題句ふしを十二月

の句あどがあくハ時雨を雪ふこのくうう

正　時雨降るを歌暦　ふと云ひがあらばいふとも雪ふるとよむを歌暦と書く

二　苗代や水ふらうらばけり

三　苗代や水ふつあさき雪の不二

四　紙鳶や時雨るきく立ぬ

紙鳶や雪見がちなる腰を

孫人に花のはたや時雨

雪ふに孫人なきはたり

五　ふ月ゐや影ふ入らうとけり

雪ちらばかりをかくさんゐ月ゐ

六　時雨降る塔を遠ふ氷室ふ

氷室ふ雪のやうなるちらげふ

七　時雨降ると乃ちり墨糸

雪とこ墨ちり魂抜のるとと牛

八　ゐる月や夜の秋ハ時雨るふ

ゐる月や雪うとむうり鳴の浪

九　附句法もかしこし　秋の雲

以秋やするどふひとつ雲の山

十　ちぐさ　小野に古き井の

雪とうえよ梅の小野の埋り花

十一　彫見せや山時雨が音

彫見せや芝居のかゝも雪の陰

十二　燥掃や見うゝが燥井の

陰隠せ燥ふよごし雪の上

あどく盜めば盜ぐも盜賊孔雀はのうれるじやどふじや

おようまづ春こあましさう扨又見うう乃雪白の仕程じや

雪乃中ふんぬぐある庫ふいひますううひとふり

ゆうくおうもも金庫ふおうと思ふに乃雪白を沢山

ふこしらく雪くよくくくふ見えくをるじや前日

あどの雪梅ハ花ますこの四人ゆうく見出見再ふゆ

見ハよいさいういと思ふをを長い白と紙い白ふゆる

りとあんじて掃くおくじやさて金庫にのぞんで

附我ゞ句がゆ句ゥ十句もあらバ席にて二三句考
ゑハそのまゝ句ぐゝうまくそこ〳〵まめるゞよいゞや
未熟者人のくるしさうに云もす句毎のゝびくに
かうゞよいゝあゝゞよいゝと文章のうゝ向ゝく和漢
するのも只者ゞあゝりの人の稚子ゆもあれバそれ
よりハその句ぐさらくゝとも来ゝもまゝうゞ双
方ともゆ場合よゝれバ色角ゆ達者のつくまゞくハ
この句句といゆもしておゝゆやゝぬゝすゞや

ちゝしその句句ハ一句ゝのよくゆゝくゞゝくゞゝくゆひゝく
つゝゆゝにこゝしらくゝおくゞ弟ゞゞやたゝくバ初編の
中にあゝるその第句がすゝりこゝ本とあゝバ

悟まゝるゝ人ゝうゝゝんの我慢とゝの

ゝ句ハ家の掛小木斗ゞ面やゆい意而の句異あれバ
何ゞゞもゝゞゞもゝゝかつくゞゞゆ又山水草木ゞ霞
ゝゞど家色の第句ゝあれバ今ゝゝゝんゝいゝゆ和ゆつゝ又
極暑極寒ゝゝゝゞどゝゝゝゝ三家三箇拙引の新見答のゝすの

前句あくびを腎者といふ所につき又ある人腎或いらぬ
ぼれ口功者など好事の影をそれらのすの前句あくび腎
まるまるといふ所ぐつはば却く乃ち句のんはけんぢ法ふ
句を指おくじやさてまるこけ句をごとくも消ノ句じや
とおもつば沈の寄こしの句ぶむづらしかるんとおもふべ
られど寄ふあくびは寄こしの係をいもぐこの句を前
句と見るく指こ木を附句とするじや
腎まるまるくの句らんの系腎をの

巻ノ末を切るく指小木ふする
題板を巻を句もあるにるるれ
又さあまいを寄ぐ句代のとるく汁
蝶習ふるをひもじい影をくを
つまるく退るぶおたぐひふ不可曾
縄の袴ノ巻ノ子指ふにふつり合
かぐく百ふ指のついるる 掾公事
法 腎 腎ぶ添ぐく村中ふ。と息

温泉を掘ふも市の酒きぞん
三足をひとりぐ〳〵引く田金言
くふもまこおるのもれが雪つどひ
かうゐふ掘物ふつ丹色バこもすりこ水ふつくゞ西又
ケ白どもをも五白ど又れバ手つ西ふ人今云五り
ごこうつくと物ふ西を又身く〳〵ひとまづ座の先
遠ふ伐じを座上物ぐやうふ海白をするぐやすぐ
ふ俗潜ふハ物ふべしくるしむべうぐどちんも云く

おうれさぐこゝじやと思ふくおくぐよい」と西張生
るおうぐらふやりおく入れるハ海るとふ岩陸
人おり海ホレく久しうおめふりませおんぐ
先くおうりをおされぬハおめでこうぐんします
活これハくよう伝おいつ出お身おされました海
ハイ先月中おはしたがいろくと言喰所ふ用事ゲ
おつく今日やうく虎のつの人今時様ハ系統の
序まおぐうチヨイと出雲ハした」と語らふ

華山人

うちを教えれば手拍子あげるおもしろしてこてかしこ
いえ面白しとそれるゞ海をるふうちゐひく（表）えしあお
とはどちらの法人ぐ（海）ハイ私ハ男僧の面ぐ教ハ
海をとります御諸がいられ様ずきぐ毎度こあさこ法形デ
みもます」あどいひつゝ海ゝれとかゝあふさ海ぐの
拍子しいでゝおのきくゞ面の拍びりざする人の
うくをさくいづこを果ても濁り居られず長くしぶ
いひつゞられバ海教ハ二人ゝ云やういとあめげある

つまあゞゝ四あゝふゝものしていまくりこんゝ四くゞりゝ
すゝうゝおしたまへとかどのとゝ言いづるゝふゝりハ言様の
宮をうつゝ（海）今日すゞめて法めふうつゝ十年も
二十年を法法言ふゝちゝやうふいろくゝのおもちおし
をうかゞひ時のうつるも忘れましゝときふあるじゞ
さいちひ面白き教法体ちすゞある法あを宮てはらう
じたらうゞこゝのあるじゞおきれましゝ仕様様と
いふふ再ハおんとおまくハ四名ます今おしゝ方つ

うりとまじめおかのはうこもあらうふあんまりだから
くみがおいとすぐふせるぐやます（森）ハテモナシ
ぐござりますすはしハ今日初てうをうすざくすぐるく
条くゝ新宮ハおまへぐいまいまもやるあるりまを仕様性
のをちくへの無ぐ物ふんふすめぬ也くそころふわ言を
おしりけさ不ぐあるじふ浪くきめつもられまつ
さうゝ三居後義宮新宮おまへぐござりつく
いそれぐ志ぐゝくやんぐ不ぐやよくゝ宮楽を

又ますふあるじの是ふいたゝゝ不ぐうふがうふをとゝも
まぐ後ふハ義つうあぐいたれをきけハ泥ぐをふむち
又もござりますすはしもおまへふ仕同宮ぐ三酒義ぐ
乳ふいゝあをあるじの本宮ハ三酒義ぐ骨じや
と云くまうゝ浪ゝ枝義ふぐついくいまを清新を
吟はしと今渇宮ゝ吟ゝまゝとらおまへふもその
清新の家ふちちくぐ物りませう（海）いうさ酒
ちゝふハ利屋もあらうぐまづ是しぐおもハくをこぐ

かうひらけて世の中とあれば秘事は決めどむしはいひし
生物学のケ条ぬど解きあくハしをおふむしこら
それハくと人をよろこびを撰者の名も世ふ
のこうをもらしく学くませうふ（表）それもまこいた
しかやしさ（裏）ハリヤおせぐござります（表）角ふ
田舎の流さちハおまくふらぎごぞんぞといふと物云
くといさくやるがこを物と云ものハいもぐ永字の八法
をもちるやうかとのぐやくふあくこあやうかとのぐや

それよりハ仮名ふ名をうとぶけ
ちあくく上象ちれといふが何のより一の物とさおもひます
いろく物ちもそまたがうあるを理を付ケ
くあれのこれのとりざくむづくく生名味
金を物と云く田舎歩ちの物ちの軍師ちが軍師
の移ふするふ自ハ附くの流ちもあれど物接く
と云く云れば流ちふうもちぐ俗者もふふ
いくぐ極よい工風ごくござるそれ故田舎の人

たちハ海ふ浦〳〵てさゝやまも紙階のゆ事ゆ人こちゞ
沼山あるいそれゆゑぐゝござる海それでも俗世と云もの
此中ふハ地ゑたゆふあるそのもござる二宗準縄菖
蒲集曉山集寄植集こそが家この俗世どもいるべき
るもすぐふあるゞ打ふしふハまこうけられぬるを
ござるゝ一がいふハ信じられぬいつぞゆ蒲の事俗
じゆとある共あヶ集と云ゆ事をもしたゞだんく
こそ打ちもふ蒲の俗とふるゑあゆとござる蒲ゞ

自ふ注解を志ゆゞゝ白のふと注のゝ管と遠ふふの
あるゞふ寓じゆ蒲ふ達の音石ゝつとハせぬゆゝと云て
あれどよゝ聖ふゝく

祐ゆゝく蒲ふきゝうせよ切ゝ事ゆ

とこれハ蒲ふ注の俗素ゞ俗ゞあらゝとふふ人ゞ
ござゝことゞいゝさまふもと思されます（結）おまへハ
さそゝくゝ見ゝけふ紙今ぬ俗世の蒲ふハおゝふしれ柱子
じゆされバ古今二宗の俗とゆらも世蒲ゞござるゝね

海　このこゝろの侍とゝふハおなじ家様方の正流義ぞいとあんと
きハめくゝござるゝ方ゝぬゞ勢冲法師賀義ノ真剣本流
宣長おど世ふこゝ名のゆゝくゝられこゝ万家ふ家の大先生
あちゞ論ふ論をうさねられこゝがそれぞさんこゝとつきりと
このとのゞもとハこゝらまくゝらまぬを紙偕者流のいゝざるゝ
とそれらのゝハ教ゝ者ふ世づりこゝちゝの方ゝ学て居て
紙出をよむふあるよりふあるゝをひとつふゝこゝいひませうが
お家ふゝるとハ廉のゝうゝ流のゝ嫁が君とハ

嵐のゝゝ京ゝ命とハこゝ風のゝゝ京ゝ命ふ家ゝくゝの教言と
長家集ゝおがあれバ出蜂ぞ求のゝく出蜂あゝ長ゝ出　さ
表　序をふひとゝ見ひもゝほしゝが牛のゝゝを黒牡丹とゝ
いふハあれハまゝぞふいふゝぞ黒牡丹とハ中ます　海
あれハ全体ちとこゝ付さゝうふゝぐゝいひつゝくゝあれバこゝ
伝ゝ孫ゝ見ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ
者ゝがあつゝく牛をゝあまゝ領ゝ居る有福ふ者ゝ有ッ
ゝ者ゝふゝ同村ふ牡丹鉢を不粗ゝて居る者ゝがあつて居

畑を書入ふ〜てびたち弟子藤と云人〻〻金を加りて書ふさ
ふが行のうこと是合ぐあ〜ぬのぐく孫ふこと牡丹畑ハあぐれこと
まづ分ることじゃそこぐこの大弟子〻が自分のことのふ嫁
られば方にが係ふおのれよくぜんと思ひつくる藁を
こゆしふすればよいふごうしることのく百遠やらのこ金の
牛の藁をたたらかけぐふさうするとその牡丹を
たちまちふうふかをとんと仕舞ふあうふりそこぐ
られ藁らの男が粉白をやつることその白がとうしは

牡丹られくたち弟子藤ハ接をこく牡丹
すぐくまるにいひうまるものじゃまくくふが方言〻がる
をつ思牡丹くと他名ふ分く峰あくひしが牛ふいまれの
あるくおこうく牛のうすを思牡丹と云ふあつてじゃ
色角黒名いとんおとのぐいまれを望ケで ハ〻と云て
にあいてぐうあれどちくぬと云くハことぶたくぬバ
いくくくあるふちくふおれいたしおまへのいまちゃる毒う
うをしを他をうくるハ永字の八法又るやうふとのと

ひとりふいへばそんかこのじやさればおまへとましとふろう
かうしてそこぶたるかさこより田をみやぎふ雪くあさ葉に
ふる扇子のあれば白合をかけくあるじのいまゆき
こちらかんと一浮たのまうでいかいる（森）りりやよからうし
とそこうり新して新参丸ハ祝引よ墨おすりつ考
ふるふ海苔をひらうぐれたおだくくあるもあるこもこか
こも白案とくのひ扇子とうでらつくるれしもあるは
活歌吟りあるをいざとくこれをさしいづれバまづ

とりあへずひらきまるふ

笛吹くるる人あり春の雪　海苔

懐の子ふ紙袋や春の雪　春丸

平井ノ保昌笛吹て舟をるあふふうろうより強盗の
つまねらふをもおかやまぶ吟りたまふ雪氣の供
おも似うよひ
雪鶯はあれ和ちふ法曹子こ案の時あるしと
いふある春の雪ふ紙袋のさあくくけしきもるくる

やうやく双方蕨時ほしといへども雪ふハよせもたしら
あれバ右ゝ方後ゝるべし

雪の庵留守とおもへバ嘘うか　表紙丸

雪の庵　雑兵ら掃き　雪てらし　海号

雪戸ざせし笹の戸をあけぬとうちつれハ嘘の雪ふ
笹田るハうゝる限者の分のよふも世の咎ハたえぐるふや
雪ちぶ彩乾のまづ形安あたら秋雪をうき掃ておくる
ふりちらし雪さの志のびぐるきさ風ぐふもとゆひあ

せゝるれバうさあれうゝうちうゝるべし

初雪や彩ふ笹の咎あらす　海号

初雪や　掃るの枝彩のゆうぬる　表紙丸

いぬさが迹しゝうし篠掃の雪の彩あつうゝ雪ふ
すゝく咎さ雪の仮名もふゝくふをうゝれと
かゝちがひの夕色ようおもひそめしゝ志のびあうきふ
かゝれ家の戸ゆ志ぬがさもありとあまあひしう
双方とも雪際笹えゝくいづれとうづれとも雪き

ぐうれどあの松おのうへうちもをやあげん
かゝ判の何ものをへく扇をニ人ぐ所ふさしもれば結
ゑくひらきつゝるふ皆ものとあれバそぐろ
うれ〳〵きおもくしして（表）今日神くこゝろくく
ゑうとふかく云さい足しがるい物ものうゝ出物て
あぐう変しもく出物も所の日記の後をもいまを暮
ませう付ふ日も暮ますうまづ出時ふ殺さう」とゑ迫
扇をおこらもしぐふうくしうちよみつゝ懐
ふしてゆりもくうしろでを海るハゑうれぐふ足迫
ゑく海（モシ）先生ゆゑまぜぬぐやそうやあぜといもゑや
りませたとへあいつぐ足しより功者ぐ足しハあいつ
ふおとらうぐ今日神くあいつとのまを合せふあん
まうむごい猪頁の蒙扇ぐや（結）さて実ハ乳の毒
あぐう足しぐ方ふもいひるすがあるぐや日記き稽の出物
ぐあそこやこゝの月帝ふもまゝ法乗の顔面ぶど
ふも物ゑ白作ふつうゝとくすぐふ代白をしてもんぜゝも

ゑ〳〵のるすぐ　おぼえ〳〵ござらう　ゑふのき様の白金の白
ハこゝろもふいつぞやちてちんぜてしぐ代を丸むし
あれバちんぼむのきふ忘ッてもんが結めく点がもすぬ
（海）サア　こゝるすぐござるく　おゐ屋ごらへバそもゝ　ゝじやが
ソリヤ一向お流行ちゝ淀じや生剥者と云ことのハ奥白と云が
上ほぐおゐれバ点ぐすやるとのぐハおい上まを下まと
きゝふ口ゝせとゝゝのゝあるを考ふよくゝるを分ぐ
後の座へ仕舞ッておゐく相引墨の撰ふあつく

マウこの白ハどゝ様のじゝやつゝうこれハアノ具形の
じゝやと云白の点点とう海ハ淀まづきを白どもふ言
点をゝぐり三ゝ絵名数用ゝ流ぐのち段が本の点ゝとお
もへバ鱈をわゝおどる人も小倍ふみやぐを舎無ふ
拍て来ゝゝれる人ゝちの白も二ヨキ〳〵と目ふ人白
色バこれふもおゝハ義理ぐもれ来あれふもか〳〵よゝこむ
せゝくつひゝき織の点ハ物来ねどちんぐゝ屋の想昌
するぐ貴二のるあもバ一ぐひふるくハそれぬそこで

足しが思ふふハ〻ふあいつとの白合ふ者まへハ一ツ体嗅ぐ
下ゑ〻へそこぐ代白ふして嘗さ白を丸ゆ〻ふ
もしさのハ嗅ぐふ貴のをれぬやうにいまぐ〻さ
らぐ栽ぐ思ひと京藤ふぐ〻やっさのをつれ京
ハさぐおまへじゆハ〻〻〻 (治) ごうぐも判者ハ
あくちよとのと流ゆのくまぐやら志ゆっさ久ふの
新向の安よみハ大ゆりじゆかいたふもすゆ〻〻〻〻
(海) いろさ屬ふの白合ふ足せ分ら〻れ〻さおまへの

判ぐつくぐと考てゐれぐこのやうふ〻ゑ事あ〻〻〻
勝ふだうたのしむあふ屬り一屬への第ふ足せぐく
古ゑを玉雲ぐ志るふまはしじや又判志も判志を
やめふして大乃ふふふ〻ふ掛ふぶり書トするぐもや
ゑ屯〻じゆ見ふ〻足しもきけふをかく〻ふ勝ケ負ケ
のさふよりハ俗階俗ゆ者ふとく〻とんをあ〻い
きよめて情おし〻やりませう〻〻〻〻〻猿りぐく
俗階の俗階ふる海の協ひへみちびいく下され

さ（治）こうからきく程ふさういひさたれど孫おき
宜生ハ夜ーがとしぐくいつぞくと思ッく居さが
まづ源の倶猪乃ふ和くめがさあくとひくるそん
あらばいひませうが先日おしくこハ仕程恠の初編
叔二編目ハどう出くといまごあんじもくのそ
あんざが教名めがはしが用へくふまくくくの始
来もふ物きく程と教名めがはくくくも今又半く程の
倶猪乃ふ物華と出とッくこ二編目の新向ふ
永組叔三次の三編目ハ天年来の足しが冊数元禄以来の
名人くちの画賛を集く縮図して位置の仕程をおす
後りどやまづ浄瑠璃ぐいもうあくほんとうの三切じや
叔来年おす四編目ふハ花桜の段白をもさうと今ううく
ふくん組とあるバ江戸色歌の人くちの絵くこれをと云白を
色切くく花くく愛張やうふめぐ変化しの切狂言無り
の後り夜き程もくふの廣のふ色源ハやめくこんど
こそハ頁ケ波ふやらちやき（海）イヤハヤとッくと春迄

まゝ」とよろこぶひつゝぬうつきつゝ立ゐるゝ夕
つぐ鶴のおぼつかなきも挑灯の光り移まぬおの老ぐ
既を右り花り〳〵うちふりつゝ揺くとうゝされくと
夢をとしうまゝらし由くいうんと〳〵の口漏見ふ
もゞさんとかうゆせ〳〵花といふまふこゝ移乃
うつりゝかるうゝもうゝひゆくふやあんん

天保七丙申歌月　是綱誌

活変先醒

玉葉下　子カ

雪渡伝礼中上に先日を初く来上仕三
出逢かし京、弾出能記雑ゐくなかに園ゐくも
よろゝ〳〵出形中迷人、他ハ出乃ふこゝろざ〳〵の老
ど、、末縁〳〵鳥つま去きふ家業でき二三子
を、惜〳〵年きめ也、仕稼性と名付〳〵小舞を
稽古いて、後言のうゝ〳〵ひゝきに乃ふ玉葉の

言調ふて、解しがたき詞くだりハなくて、取て操ひ
讀するに、よく〱得旨を弁へて、只今目に見るが
持扱ふ形まで、余所ながらつき、後々ハ蓮の
葉の、姿形ふも至り犯だしとおもハゞ才書
の席ふもとへるべく、文飾あるものハいさゝか乃
俳あるものゝ為ふ仕様状ふおいてハかゝる私
の類なかし、治秋事の風韻不能ある事
俳も悉く、標附合の類ふして、詞和の自在又
自由なり、伸る葉、摺の本、共ふよろし、舎の
名ふハ、鳥の百首あれバ、千携録、木兎を思ハ死樹音
の見識一しほ也、十二ヶ月の初暦班る已月の
旅人ハ此冊中の花なるべし、和歌の深意を
うかゞふに依て、冥古の句の墓基集、明月や
さゝ波ふてにはの龍笛妙之、小野の古るハ、泊
ぐけの芝孫兄猶さるおだし、美玉を握り
かくしたる二十六吟、雑中の雑なくて、上手の
手際なる凡、綱のうしろ黄、紀大臣のきる事
八千代の精、形状年市の弓術頗る的中也

茶の実の樣、芸庵のいとがき、信濃屋治
兵ゑるがぢ、日本橋の魚屋、魚庵の形像
京、魚屋の為ゑ、長服竹の藍玉大分後を
おもひ出り、ちろり酒本小庵の呉へいとり
商形の青竹、家蝶まく、信濃方のはらく
藤、茅戸ちまり稽古の本の出ゑ、後
こゞる〳〵ゑ、連句の事八清紙屋の酒造
亥ゑ、中本ゑ、〳〵此仕掛八小鍋本出来
いひ出ゞ、とハ忘れ難く、いとゝ武士の
先祥小答しゝ、ゑ附方小摺本の愛ゑ、
終家、井ゑ月の小徳利、戸者の出形酒器
庵の魚屋、小坊主の本ゑ、二階の拵ゞり
多、芸答八為時掛り、兵衛の一体あり、色
彼ゑ、拵ゞ芸ゑ、元利ひぬゑ、ひろ貴心
むゝ八むゝ、ゑ為の為むゑ、初常の日
ゞゑ〳〵ゑ、此時の為形本八玉鍋の形
ゑ、彼ゑ為ん、書機の数河八菊多本形士の
意面貴本亥びゝ、見所数〳〵ゑゞし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月十八日

[illegible]

[illegible]

天保八年丁酉夏

書林　江戸芝神明前
和泉屋吉兵衛板